



伊藤 慶子 (いとう・けいこ)
陶芸家。久野陶園14代目。
1960年、笠間焼元祖の窯元久野陶園に生まれる。愛知県立瀬戸窯業高等学校陶芸専攻科卒業後、結婚を期に個人作家として作陶活動を再開。陶炎祭やクラフトフェアなど、市内のイベントに参加する傍ら、個展やグループ展を開催。2007年、先代の死去により久野陶園を継承。こうば屋根や付帯設備の老朽化が進む中、市内の有志らを中心に、施設の再生と存続を目的にクラウドファンディング(CF)を立ち上げ、現在、その支援金をもとに修復が進み、ギャラリースペースなどを新設する計画が進んでいる。

笠間で生まれ育って、子どもの頃の思い出といえば、母家に隣接するこうばの世界です。
こうばに行くと、父や職人さんたちをはじめ、たくさんの方が出入りして、みんな近くに住んでいたの、忙しいときは奥さんたちもほっかぶりして窯づめとか窯出しとかのお手伝いに来ました。私が生まれる前はこうばの二階で寝泊まりしている職人さんもいたそうす。
賑やかで、活気があって、みんな何かしら作っていて。小さい頃は遊び道具はなく、テレビもなかったの、遊び場といえば、こうばか裏山。あちこち裸足でチョロチョロして、いたずらして、何か壊して怒られる、というのが日課でした(笑)。拍子木があって、始業の時や、お茶の時間にカンカンと鳴らすのが母家の者の役目。時々、「やらせて」とせがんで、上手く音が鳴ると嬉しかったのをよく覚えてます。
小学生くらいになると、手伝いも日常茶飯事。当時、水戸の借楽園の梅酒が入った、麻紐付きの徳利をたくさん出荷していた、中学の頃から祖母と一緒に、中学の頃から祖母と一緒に、毎週末、石膏での鑄込みの作業や乾燥作業。思いつくとうんざりするくらいです(笑)。
こうば中心の生活、それが自然でした。ですから、「後継ぎ」になるのも自然に決まっています。それが「後継ぎ」ではなく、「後継ぎ」を継ぐんだよ」と言われるのが疎ましくて、誰も知らない土地に行きたかった。とにかく、家を出たかった。でも、ものづく

りは好きでしたね。
県外の窯業の学校を出て、二十二歳のときに家に戻りましたが、結婚を機に家を出て、娘を授かり、新しい生活が始まりました。焼き物から離れ、「普通の生活がしたい」と、事務の仕事に就いたこともあったのですが、どこか物足りなくて、動いて作業をするのが好きなんです。板金塗装の仕事に就いたとき、社長の奥さんに「伊藤さんは焼き物ができるんだから、自分で始めてみたら」と薦められて、結局、借りていた家の庭に小さな窯を作って、焼き物を始めちゃいましたね。
平成十四年(二〇〇二年)に父が亡くなって、それからですね、時々、戻るようになったのは、がんとしたころば、父がいなかったころには違和感がありました。「荒らしたくないな」と思って、屋根の修理を機会に、自分の作業場をこちらに移しました。
笠間焼といえば昔は、柿釉(かきゆう)をかけたかめ・すり鉢の日用品、食器などでしたが、今は新しい作家さんたちがたくさん笠間で創作活動をしていて、作品もバラエティに富んでいます。伝統だけにとらわれない、寛容な土地柄なのでしょうね。
若い作家さんが純粹な気持ちで自分の求める作品を作る姿を見ると、「そうだよね」と感動を覚えます。私は門前小僧のように作業は覚えてしまいましたから、作り方は知っていても、焼き物に対しては「好きにならなくちゃ」と自分に強い時期が長くて、五十を過ぎてからですね、自然な気持ちで好きだと感じるようになったのは、それがわかって、今、作ることがとても楽しいです。(了)



この街の伝統と歴史を背負って、今、素直に作陶の楽しさを感じる。

笠間焼発祥の窯元で生まれた。その生い立ちと生業をすべて受け入れなければならなかった半生。焼き物を作る技術も日常生活で身につけた。だから、「陶芸家」と呼ばれるのは、今でもなんとなく小恥ずかしい。でも、陶芸に興味を持って街を訪れる人たちと交わるのはとっても楽しい。「人が好き」と笑顔で話るとき、多くの人が行き交ったこうば(工場)での思い出が鮮やかに蘇る。

伊藤 慶子さん

陶芸家

